

安威川河川敷にやって来た。緑の葉、軸に黄色い花“カラシナ”という“菜の花”だと思っていた。「菜の花、なんてものは無い、菜っぱの花、すべての菜っぱに花は咲く、菜の花というのは無い」とキヌさんがいっていた。調べると“菜の花”というのはやはりあの黄色い菜のことで別名“アブラナ”という、一面に咲くあれはやはり“菜の花”で安威川に一面に咲いているのは“カラシナ”だそうだが、二つとも親戚のようなものだそうだ。これ以上植物の事を詳しく知っても仕方がないのでこの話は終わり、という植物を愛でる方々、観察している先生怒られる、ゴメン。2.3日前「花を発見」と写真が送られてきた、近所に咲く花、木にいっぱいの花が写っている。展覧会が3月の末の週にあった、桜が咲きほこる時期、この時期にはいっせいにいろいろな花が咲きほこる、そんな花の時期だが、展覧会のこと頭がなかがいっぱい、花が咲いていると花を見ながら心ここにあらず、花も車も人も横を通り過ぎていく、風がほほを撫ぜ、音が耳をかすめる、香りが匂いが鼻をにあたる、触覚の錆びついた身体には琴線も緩んでいる、歩きながら、自転車に乗りながら「花が咲いているなあ」とは思いつつ、見てみよう感じてみようという気持ちが無い。そうそうしているうちに、時間が経ち次から次に花が咲きだし、いっぱいの花に感動も薄れ「花か・それがどうした」というようになってしまう。1月が終わって、厳寒の最中に梅の便り。サザンカやツバキはあちらこちらに咲いているが、失礼ながらあまり好きではない。そうこうしていると水仙の白が、梅の白が、赤が、ピンクがやって来る、やっと色の付いた花、防寒具を着ながら春の兆しを感じるがその頃から「さあ展覧会が近づいてきた」と気持ちはそっちの方になってしまう。絵の教室の方々がたくさん花を持って来る、名前も知らない花、草に咲く花、木に咲く花、世の中にはこんなにたくさんの花があり、女の方々はそんな花を愛でているのである。

中西さんが展覧会の写真をたくさん撮ってくれた。「時間をかけて三脚を使ったら誰でも撮れる」というけれど同じ展覧会風景でも「オレのと違う、上手い・・・」とうならされる。最近発見したんだけど、これはまだ人には言っていないんだけど、まして中西さんに言うとなんか「・・・？」てなことになりそうなので黙っているが、と前置きが長いには失礼。まず古いレンズ、50年前のフィルムカメラに点いていた50ミリのマクロレンズ、これで写すと「なんだかきれい」普通にスナップ写真なんかを写す場合は今時のオートフォーカスのズームレンズがいいが、ヒトを一人、花を一つ、フィギュア君を一つなんて場合は「え」と驚くようないい感じの写り方をする、ただ、ピントが合わせにくく、微妙にピンボケになっている、ピンボケとは懐かしい単語で、今時ピンボケなんてありえない、デジタルカメラはピタリとピントを合わせてくれる。撮ったピンボケ写真を見ていると「このピントが合っていないのも面白い」「後ろのボケぐあいが面白い」と気に入っている。もう一つは データの事、今まで jpg でばかり撮っていた、たまに jpg と raw で撮り、いくつか選択し修正加工で保存していた。これを raw 一本にする、現像ソフトで選択したものの中から一つを取り上げ、photoshop に写す、この時点で今までと違った写真「え、いいじゃん」というのがいくつも出てくる、へたくそのオレも、ちょっとはいいものが撮れそうと予感がする、遅まきながら嬉しい話。展覧会が終わり綿向山に行った、いつもの3人組のおねえさん方である。50年前のレンズはいいのだけれど、使いにくい、時間がかかる、三脚が欲しい。昨日も伊丹の昆陽池にある昆虫館に行った、子供連れでゆっくり撮っている時間も無かったが、パソコンに入れてみると「おや、ちょいませか」というのが2.3枚ある、これからはこの raw 手法でしばらく撮ってみよう。ついでなので綿向山の話：この山行計画は3月中旬だったが、前日に晴れか雨かはっきりせず、一応集合場所に行ってみたがやはり降り出し「これではダメだ」ということで解散をして帰った。その時点では「軽アイゼン」と書いていたが、4月の声を聞いてこの辺りの山にはもう雪は無いだらうと登り始めた。この山「わたぬき」とばかり思っていたが「わたむき」で正解らしい。なかなかの人気の高い山なのか、webにたくさん記録が載っている、我々が行った日の記録も写真ももちろんの事、我々が計画して中止になった頃の記録が写真がWEBのページにたくさん載っている。さすがにその当日は雨が降っていたので記録は無い。もう雪が無いだらうと思っていたが、てっぺんより少し下の辺りには雪がまだまだ残っていた、滑りやすい冬道を「キャッキヤ」言いながら登った、てっぺんは穏やかな暖かさ、霞がかかって向かいに「雨乞い」もぼんやりとしか見えないが、でっかい山の姿が堂々と見えた。半月前の写真を見ると雪が相当残って寒そうな景色、軽アイゼンで行けたかどうか。ハイキングにはもってこいの時間で登れる山、2時間ぐらいで登れる、道は綺麗に整備されている、頂上にある神社の参道でもあるそうだ。

市の検診を毎年3月に受けている、いつもの病院に結果を聞きに行った。「高脂血症・不整脈、要観察ですね」「便は陽性反応が出ている」「検査はどこか紹介してもらえますか」「うちでもやってる」「じゃ」検査の予約を入れ帰った。「これはやだね、またもや内視鏡」5年ぐらい前の事が思い出される「これ、内視鏡しないといけませんか」「もちろん」とぎょろり今日のオヤジさん先生の顔が近づく。最近は飲酒の量も回数も減った、消化器官には優しい生活をしていると勝手に解釈をしているが、野菜中心というのはひょっとして、消化器官には負担かも知れない。油っぽい食事、肉を中心に“揚げ物”“炒め物”を食うとなんだか胃が重い、というのは知っているが、生野菜を食って胃の中に未消化のゴロゴロがまだまだ残っているような感覚に悩むということもある。牛や馬、草食動物が草を咬んで、咬んで、消化器官の中でどろどろになる、このどろどろにするような能力はヒトには無いのかもしれない、いずれにしても草食動物の消火器の強さをヒトは持っていない。人が肉食動物なのか、草食動物なのか、この奥深い話は、詳しい事は知らないが、肉の方が消化器には優しいのかもしれない。5年前の大腸内視鏡検査の事をオボロゲに思いだしてきた、まず一回目は問診と検査日の予約、当日の朝に飲む薬を渡され、「検査日は、家で、朝から薬を飲み、昼ごろに病院に来るように」といわれた。当日は朝からアトリエで2リットルのペットボトルに薬を入れ2.3時間で飲み干した、途中からゴロゴロ便が出だし水のようになってきた。自転車でその病院まで行った。

今回の検査では、前夜8時に食事を終え下剤服用と書いてある。「これを飲んだらおなかゴロゴロしだしますので」と看護婦さんの言葉通り朝の4時頃に便意で目覚めある程度が出た。次に6時頃に目覚めたが5分で行ける病院なので9時までの3時間アトリエで雑用を片付けた。今、同級生の仲間から「文集を出すので版下を」と頼まれている、その原稿をちょっとずつ片づけているが、校正に皆さんに見てもらうためWEBにアップして時間を過ごした。このアップする作業は得意ではない、デザインの作業がスムーズに進まない「そらあ、ホームページビルダーなんて使っていたら、アカン」「・・・?」「HTMLで、ちゃんとしないと」上の娘に言われ「HTMLはできないから、ねえ・・・」と思いつつ、なんとかゴリ押しでこなしている。

病院に入ると早速看護婦さんに「こっち」と呼ばれ、TVがでんと目の前にある部屋に連れて行かれた。「トイレはここ、どろどろだして」と2リットルのペットボトルを渡された。半日かかると覚悟をしていたので、ぶ厚い本と筆記用具をカバンに入れて持ってきた。馬場あき子著<鬼の研究>いいですぞお、この話は後日。「ペースが遅いよ」と看護婦さん、10時だと思っていたら10:30になっている「トイレは？」と聞かれ慌てて飲みだした、これはいかん、体操をしようと思いついてある体操用マットの上でいつものストレッチ、どろどろ飲みだすとトイレ、トイレの連続。昨夜の下剤が効いているのか、病院に来て3回目ぐらいのトイレから便は全くの水、小便よりやや濃い色の水だけになってきた。「どう・・・見るから」看護婦さんが便器の中を見て「ああ、これで大丈夫、30分ほどしたら上がってきて」5年前は前日の下剤は無かった、当日も粉薬を渡されそれをペットボトルに入れて飲んだ、最後のトイレでも水状態までにはなっていなかったように思う。内視鏡検査は長く感じた「早く終われ」と念じた、冷や汗も出た。「終わりましたので下で説明をします」モニターに映し出された画像「ここが入口、きれいなもんだ」「だんだん奥、此处にちょっとふくらみがある、癌なら色が違うけれど、なんとも無い」「精研しようか迷ったけれど・・・」「痛がるしなあ・・・」「今回の内視鏡検査、大腸がん検診は問題なしです」「ありがとうございます」待合室に出た、緊張がどっと融ける、緩む「やった、がはは」と声を出してはいわれないがホッとした。5年前は一回目の検査でポリープが見つかり、数日後、1日入院でポリープ除去をした。今回は検査だけで終わった。5559円の支払い、下剤を含め7000円の出費なり。病院だ、薬だ、と金がかかりだす、今まで一切不要の出費、時間も行動も拘束される、「病院なんかに行くか」「薬なんて飲まねえ」「死ぬときは死ぬじゃ」なんて威勢のいいセリフは吐けそうも無い、オレの人生、威勢のいいセリフこそ吐いてこなかったが、破天荒というかデカダンスではなかったのかなと今になって思う。威勢のいいセリフは吐いてこなかったけれど、かたくなに拒否をし、ツイと横を向き、あらぬ方角を目指した、これは天性のモノ、皆様、ご迷惑をおかけして申し訳ありません、これは死ぬときのセリフだろうな。68歳、少し前に比べても、体がだるい、動かない、勘が鈍っている、と如実に感じる。運動はしている、飯も食っている、毎回、日々飲むような薬も無いと自負しているが、これも何時まで続く事やら、しかし、弱気はいかんぜよ。

馬場あき子著<鬼の研究>：あとがきに。反対性、反秩序が、基本的な鬼の本質であるとすれば、近代の封建的社会体制の確立してゆくなかで、当然、鬼は滅びざるを得ないものであり、そして滅びたといえよう。

馬場あき子さん、どんな人かなと検索してみると、webのページに続々と出てくる有名な歌人だそうで、民俗学にも詳しいそうだが、その画像を見ると、着物姿の好々爺ならぬ優しげなおばあさん、オレより20歳ほど年長だけど亡くなったとは書いていない。

節分に豆つぶてで簡単に追い払われる鬼、近世社会での義賊、弱きを助け強きをくじく股旅仁義で昂ぶる庶民感情、山人・山伏系の鬼の系譜の末流に凶悪果敢な実力を発揮した天狗、長高な赤鼻と朱顔・高足駄・大羽団扇とういう定型が成立したとき、その怪異性には明らかな侮蔑と揶揄が混在している。鬼の定形たる牛角・虎皮の褌がここにも想像され、グロテスクなとげとげの鉄棒が付与された。それらはすべて、古代的・宗教的権威に依拠する者の衰亡する運命を、非人間的なものとして怪奇な外形に誇張しあらわしたものである。明らかにこれらは、丑寅の陰湿な一隅に追いやられた古代的・呪的な精神の衰れなカリカチュアである。

日本の鬼が土俗的束縛を脱し、その哲学を付与されたのは、中世において鬼女（般若）が創造されたことをもってはじめとしてよいと考える。般若とはもちろん能の鬼女で、それは中世の鬼のなかでもっとも鬼らしい鬼である。なぜなら、三従の美德に生きるはずの中世の女が、鬼になるということのなかに、もっとも弱く、もっとも複雑に屈折せざるを得なかった時代の心や苦悶の表情をよみとることができるからである。般若の面は、そうした鬱屈した内面が破滅に向かう形を形象化して、決定的な成功を収めたものといえる。中世の鬼女がきわめて独自であるのは、たとえば能の詞章が、鬼とならざるを得なかった女の内面を綿々として関わり、あるいは鬼となってからさえ、その渋滞しやまぬ情念のゆくえを問いつづけていることである。美しい七五調と花鳥故事に粉飾されたその詞章が、悲哀の極致、凄惨さを見せる般若の面と照応するとき、出口なしの中世の心がまさに女の姿を借りて哀切な叫びをあげているかと思われる。<略>そのようなかたちで累々と屍を積み、土と帰したであろう鬼とは何か、それこそ王朝繁栄の暗黒部に生きた人々であり、反体制的破滅者ともいうべき人々であった。説話の世界にあふれる庶民的エネルギーは、とりもなおさず、破滅しつつ現実を生きぬいた鬼どもを支えたポテンシャルティであったといえる。王朝期とは、このような人間的な鬼と、土俗的な鬼と、仏教的な鬼とが混然と同居した時代であり、数かぎりない妖怪譚と呪術合戦を生みにいたった時代でもあった。

○日本民俗学上の鬼。祝福に来る祖霊や地霊。 ○山伏系の鬼。山人系の人々が道教や仏教を取り入れ修験道を設立。天狗。 ○仏教系の鬼。夜叉、羅刹、地獄卒、牛頭（ごず）、馬頭鬼（めずき）。 ○人鬼系。放逐者、賤民、盗賊、それぞれの人生体験の後に、自ら鬼になったもの。 ○復讐をとげるための鬼。怨念、憤怒、雪辱、それらのエネルギーから鬼になる。

そしてここに、わたしはもう一度<おに>と<かみ>とが同義語であったかもしれぬという説にたちどまらざるをえない。それはいいかえれば人間の心に動く哀切な両面である。先生の話は日本の古典、古事記、今昔物語、万葉集、たくさんの物語の中に登場する鬼たち、かの西行の話と続く。

「西行於高野奥造人事」西行人を作る。

西行が高野に住み修行をしていた頃、同じ聖の修行者と月を眺めて物語をすることがあった。その聖もやがて京に登ってしまったので、西行は「同じ憂世を厭ひし花月の情をもわきまえらん友」を恋しく思うあまりに、ふと、むかし聞いた恐ろしくも懐かしい話を思い出すのであった。それは、人も無い曠野の闇に「鬼」があらわれて、白骨化した死骸の骨を、取り集め、再び人間に還元するということであり、自分もその方法をなんとか聞き知っていたのである。たまたま心の友を失った寂しさからか、知らず知らずのうちに曠野に歩み出た西行は、折からの月明かりに、遺棄され白く晒された人の骨がほの白く散りぼうているのを見出した。西行は聞き知るとおりに、その骨を集めてつる草で結び、秘呪を行じて人間を還元することに成功した。

あの時代にこのような発想、このような物語が語られていたとは驚きと称賛を禁じ得ない。これを聞いてオレはヒトの事を、ヒトがなにを考え、なにを想うかと考える。中国からきた考え、物語だろうか。

羅生門という名の門が京都にあった、平安時代の昔にあったそうだ。野口武彦著<今昔物語いまむかし>を読んでいる。羅生門という有名な物語は、芥川龍之介が今昔物語を基にして書いたそうだ。今は昔のことである。摂津の国から盗みをしようと京都に上ってきた男が羅生門の下に隠れるように立っていた。日はまだ暮れきらず、北の朱雀大路には人の行き来が繁く、背後の山城方面からも人がやってくる、男は人目を避けてそっと楼の上に上がる。・・

ここで話は脱線する、平安時代の京都のこと、羅生門のことに話がおよぶ。まず当時の京都は極度に治安が悪く、放火、強盗が横行していたそうだ。土地を追われた良民といわれる農民が浮浪人化して京都に流れ込む、頻繁に起きる災害が大量の難民を発生させた。承和七年(840)元慶元年(877)寛平元年(889)の飢饉、延喜十五年(915)の疱瘡、長徳四年(998)の赤斑瘡：はしか等。平安時代の記録にしばしば、都大路に累々と死骸が横たわる酸鼻な光景が記述されている。よく引用されるのが<本朝世紀>正暦五年(994)四月二十四日の記事だ。「死亡者多く路頭に満ち、往還の過客鼻を掩てこれを過ぐ。鳥犬食に飽き、骸骨巷を塞ぐ」という一文だ。そんな時期には決まって妖言が世に満ち、怪しげな新興宗教が興り、盗賊がはびこる。

次に建物の話、1978年大林組プロジェクトチームが平城京、羅城門の発掘跡を参考にして復元したデータに基づいて、京都市歴史資料館が掲げる羅生門の規模は、幅32メートル、奥行き7.8メートル、高さ21メートルで、建築様式上、階段がつけられる設計ではないのである。同じような知恩院と南禅寺の門は、楼門建築の様式通り二層の門の両脇には、山廊と呼ばれる平屋の建物が付属していて楼に通じる階段を覆っている。平安時代の初期に建てられた羅生門、何回も、唐使、渤海使等が羅生門に入って当時の迎賓館「鴻臚館」があった。当時は市街地形成が左京の東北部に偏り、朱雀大路の西側の右京、西の京は下級官吏や庶民の小家が散在する場末の土地だった。草ぼうぼう閑散とした風景の中に、羅生門が建っていた。むかしは羅生門といったが、今は羅城門という。ただ作品名は「羅生門」のまままだそうでややこしい。

なるほどそういう時代背景、よくぞたくさんの資料が残っているものだと驚く、階段のない大きな建築物の二階にどのようにして死骸を持ち上げたのか、どうしてそこにたくさんの死骸が集まったのか、食い詰めた浮浪難民が集結する京と市街の場末の地。親のいない子ども、老人、病人も集まる。雨露をしのぐねぐら、元気なものは盗人に走り回る。真っ暗闇の夜、考え想像するだけで、何かが飛び交い、何かがうごめく、何かが襲ってくる、何かが叫び、何かが妙な音を出す。腹が減る、身体が震える、異臭がする、腐臭がする、希望もない、明日も見えない。身体も心も弱っていく。何も考えられない、横たわって息をするだけ、かゆい、さむい。ヒトとしていきものとしてただ生きているだけ、もうこれはオニだ、ヒトだ、カミだ、亡霊だ、幻想だ。

羅生門に棲んでいた鬼、どんな鬼たちがいたのか。天慶二年(939)ある人が馬に乗って羅生門の下を通りかかり、漢詩を朗吟して通り過ぎようとしたら、楼上から何者とも知れず「あわれ」と声が響き、佳句に鬼神が感じたのだろうと評判になった。同じように「十訓抄」では、楼上の鬼が下句を唱和した話になっている。

宮中の宝物だった琵琶の名器「玄象」が紛失する事件が起きた。ある夜、源博雅という管弦の名人が、清涼殿の南の方角に、間違えようのない玄象の弦音を聞いた。朱雀門まで行っても音はもっと南のほうから聞こえる。南下して羅生門に着いた。音は楼上から聞こえる。音は世の常の響きではなかった。博雅は「これは人間業ではない、鬼が弾いているのだ」と思い「そこでお弾きになっているのはどなたですか」と問いかける。弾奏の音はぴたりと止まり、楼上から縄をつけた玄象が下ろされてきた。またいちばん有名な謡曲の「羅生門」、渡辺綱(わたなべのつな)が鬼退治にでむき、羅生門で鬼の腕を切り落とした。後日、鬼がその腕を取り戻しに来ると予告する話。

盗賊すら恐れる鬼、羅生門の楼上に棲む鬼が、自分の目の前で死骸の髪を抜く白髪の老婆の姿として現れる。くどくどいい訳をする老婆、「こりゃ人間だ」とその髪、着物を奪い去る盗賊、オニでありヒトでありカミでもある。

1週間前のリベンジ、6:30 阪急茨木駅西側へ行った、しばらくするとグレー色の久子さん乗用車、茨木 IC から高速道路を滋賀県に向かった。御池岳は何度か行っているが、しばらく前の話、5年ぐらい前のことだったと思う。澤山さんがゴロ谷から登るのが好きで、急登な斜面を四つんばいになって登った、どろまみれになり「ヒーヒー」いいながら登った、登りきるとそこは桃源郷、だだっぴろい広がり、石灰質の白っぽい石、所々にぽかりと池がある、霧に湿った日、雪で真っ白な日、寒く凍てついた日、快晴だと叫びたくなる日、何回も登っている。

「ここから登りましょう」「え・・・」以前登ったトンネルを過ぎたあたりから登り始めるものだと思っていたが、と見渡すと、登山口の看板がある。「あそこが崩れているが、帰りは、あそこから帰ってくるので、通れるかな」なるほど林道を塞ぐように上から土砂が崩れ落ちてきているが、歩くぶんには何とか通れそうだ。車を道路の膨らんだところに止め歩き出した。杉の植林地帯、太い杉の下のほうにはビニール紐がぐるぐる巻かれている「この辺りは熊がいなくて鹿よけかな」といいつつ急斜面を登る。道があやしくなってきた、登山道なのか、けものみちなのか、ふみ跡のように感じられるが細い。いずれにしてもこんな斜面で暮らす獣君、身体能力はすごい、登るにしろ下るにしろポンポンパッパ、自由自在の駆け巡る、「えいこらさ」とおっかなびっくり斜面で歯を食いしばるようなへまはしない。けものみちなら上へ、下へというだけではなくて、横の移動もあるのでおいそれとそれに伝って行っても登れない。鉄塔の作業道を、杉の間を抜けながら歩く、ややこしい谷筋、土が湿って滑りやすい、すべれば下へずりずり、こういう場所は苦手なオレなのだ。

1時間登ってきた、急登の植林地帯、暗い杉の中を抜けると下のほうに杉の頭が見える。「食べて」とてんぷらをいただいた、昨日「このお菓子を持っていこう、いつももらってばかりではすまない、これは旨いぞ・・・」と思いながらばたばた時間が過ぎ、そのお菓子を入れ忘れた、「ごめんいただきます」とぱくりと食った、旨い。毎度の話だけれど、燃費の悪いオレ、サンドイッチと弁当をいつも持ってくる、昼飯までに腹が減ってくる、それまでのつなぎにまずサンドイッチをほおぼる、てんぷらもほおぼる、お茶を飲む「旨いねえ」。またまた急斜面「こいつをワンピッチ登りきると尾根道」「おお、福寿草」「もう、遅いと思っていた、雪の中から顔を出して咲いている花なのに・・・こんなところに咲いてくれた、嬉しい・・・」斜面のあちこちに黄色い福寿草、絵の具でいえばイエローと言ってもディープに近いイエロー、緑のぎざぎざ葉っぱの上に咲いている、蕾もある。「花、そらあ・・・オレのアトリエのほうきれいだよ・・・」と昔から言ってきた「大きな声では言わないが、昨日筆を入れた絵、輝いていたよ」「こんな花よりスゴイヨ、ザマ～、ミロ」とは言わなかったがそう思った、接写で写真を撮った。

尾根に上がってすぐに鈴が岳についた。建物があつた石組みの跡、赤錆びたドラム缶が5.6本、お椀のような登りが終ると次のピーク、鈴北岳に到着。殺人事件の現場のような黄色いテープが張ってある「なんだろう」「あっちに行っちゃいけない、というテープ・・・？」近づくとき大きな穴、「えっ、これは深い」直径10メートル、深さ15メートル、こんな穴がふらり歩いていて陥没すれば少々の怪我ではすまないねえ、これは怖い、と次にまた、枝でふさがれた穴「深さは」とのぞき見ると、人の背丈よりずっと深い、石灰質の山はこういうことがあるんだね。向こうのほうに大きな台地が見える、お池の台地、ここは何度来てもいい、白っぽい石灰岩、風に苛め抜かれ横向いた木々。「お池がある」「あっ」「御池岳は池が多い山ということ・・・」「今、それ、気づいた、池が多いから・・・御池岳」

12時「飯にしましょうか」御池の台地、ぽこぽこのなか、雪が所々に残っている、「さあ、弁当」ふわり暖かい気候、のどかな季節、寒くはない、木々はまだ葉が出ていない、霞んだ空だが一部は蒼い。そのあと御池岳山頂、奥の平という平らな台地をめぐる、斜面を自由に歩き回って鈴北岳から鞍掛峠に向かい、途中「ここじゃないかな」と赤いテープがある辺り「ここだ、ここを左」と尾根道を下る、どんどん下る、鉄塔がある、まもなく林道が近づいてくる、川が見える。9時に出発、4時に車に帰り着いた。コーヒーまで飲ませていただいた。

今日はいつもの3人組プラス男2名の5人、いつもの駐車場に集合、東吉野村を目指した。三日ほど前に「まちがいなく晴れの天気」と確認後、友人の榊井君に連絡「素麺一箱ほしい、朝寄るので用意しておいて」「待ってます」とうれい返事がきた。もう10年ぐらい会っていないだろうか、30歳代のころだったろうか、画材屋に勤めていた彼とは度々顔を合わせていた、「もってきて」「てつだって」とわがまを言っていた、素麺屋の社長になるとは思ってもいなかった「あんな田舎で暮らすのはいやだ」「都会がいい」と口癖のようにいていたが、10年前に会ったときにはひげを生やして堂々とした社長になっていた。

村の中、細い道を「ゆっくり」「あ、ここだ」何か土産をと思いつつ、奈良のはずれといえども洒落た菓子屋も、旨そうな店もそろっている、まして彼は社長、接待もこなしているはずと考え、「タブロウを持っていこう、もう何回も会えるわけでもなし・・・」と先日の展覧会に出しそびれたものを、丸めて袋に用意していた。車の後ろを開けると誰かのリュックの下敷きになっている「あああ」ひやりとして、それを取り出し、頭がまっ白「まさかまさか、ひびが入っていないか、折れていないか」後先を忘れて、中身を出し点検、暗い室内だがたぶん大丈夫だろう、痛んではいないだろう「座席に持ち込めばよかった、手で持っていればよかった」と後悔しきり「彼と一緒に写真を撮ろう、二人のツーショットを撮ってもらおう」と思っていたがすっかり動転して忘れてしまった。「何歳になりました」「68だあ」「まだ60歳代ですかあ」「子どもが、オッテモンに行っているの、茨木にはいずれ行きますよお」何歳年下なのか忘れてしまったが、まだまだ若い、相変わらず細い身体つきだけれど貫禄が出てきた。

ここの手前で「野菜が買いたい、道の駅に寄りたい」というリクエストに大宇陀の道の駅に寄った。高菜80円を3個「これは漬物にしよう」「旨そうな、菜の花の先っぽ、100円、これはゆがこう」

さあ登ろうと歩き出した、2月にきた時には駐車場の雪が凍っていた、今日は冬用ヤッケを持ってきたが、長袖半袖Tシャツの重ね着ルック、これで十分に暖かい。30分足らずの林道歩き「こんなに長かったか」と思うころにやっと登山道が現れた。10回ぐらいの渡渉「こんなに渡渉があったか」と思いつつ「オレは相変わらず、山道の記憶に乏しい、覚えていないんだねえ」と述懐、しおらしい振りをしながらも、「オレは、別のものを見ているんだよ」「自然を、世界を、世の中を、これが一番大事なんだよ」と負け惜しみ。とにかく渡渉、この一ヶ月はぐずぐずと雨の日が多かった、毎日のように降っていた。ましてこんな山間部、川の水もゴウゴウと流れていたんだらう。渡渉場所にはロープが張ってある、危険なところは少ない、ゆっくりじっくり楽しんで登ろう。1時間半ぐらい経ったところで、谷筋から離れ、つづら折れの登りが続く「もう近いよ」峠が、空が見え出した、しばらくいくと水場に出る。パイプからどンドン水が流れている「湧き水じゃないが、流れている水だが、旨いよお」水場があることを忘れていた、コーヒー用の水道水をペットボトルに入れて担いできた「ま、いいか、今日の、荷は軽い」

昨日は同級生十数人がアトリエに集まって、文集に、看板に、題字にとてんやわんやの一日「山があるので、飲まないぞ、食わないぞ、早く終るぞ」と宣言していたが、楽しい仲間の喧騒に、「いっぱい、いっぱい、もういっぱい」と楽しんでしまった。

登山口に黒いハイエース、格子窓に改造してある「犬用でしょうね」「猟犬？鉄砲うち・・・」と話しながらすっかり忘れていた。でっかい犬が男女のお二人と下ってきた「シェパードの雑種かな、このての顔、先日も見たぞ」赤茶のきれいな毛並み、「犬には好かれるオレだ」見つめるが、キャツめ、振り向きもせず主人の手を見つめている、旨いものをねだっている、この大きさよく食うんだらうね、飼い主も目を細めて可愛がっている。間もなく明神平らに到着、ちょうど12時、2時間ぐらいで登れた、弁当を広げた。50年前にはスキー場があったらしい、2時間近く歩いて登って滑っていたのか、当時の鉄の残骸をいくつか発見。

野口武彦著<今昔物語いまむかし>またまたこの本の続き、今回は「芋粥」の話。ところでこの芋粥の食べ物、この芋は、火に掛けられたダシ入りの汁にヤマノイモをすり潰しそそぎに入れたとろりとした汁、芋がもろもろになった汁をすすめるものだと思っていた。“ヤマノイモ”と“自然薯”と“長いも”は違うものなのか同じものなのか長年疑問だったが、調べるに同じものようだ。ヤマノイモのことで思い出すのが“ヒゲさん”土佐の山間部で育った彼、親が炭を焼いていたというだけあって、山のことはよく知っていた。

「この葉だよ」と小さい葉がついた蔓をたどって「ここだ、ここを掘れ、でっかく掘るんだよ、人が入れるぐらいに、深く大きく掘るんだよ」とわれわれに下地、半信半疑で掘り始めた、人が入れるぐらいの穴はそう簡単には掘れない、山の斜面、土が固い、石ころがある、木の根もある「近づきすぎたら、芋が折れる、回りからそっと」仲間の穴を巡回しながら口うるさく指導「本当にこんなでっかい穴が要るのか」とぼやきつつ掘り進んだ。「牛蒡のようなやつがあるだろう」といわれ、周りを掘り進み、穴の底にしゃがんで、手で土をほぐしていった、本当に曲がりくねった牛蒡ぐらいの大きさのヤマノイモが現れた。「子どものころ、これを料理旅館にもっていくといい値段で買ってくれた、いい小遣いになった」「ふーん、これがヤマノイモ、店で売っている丸いやつは・・・」「ヤマノイモはあくが強い」掘り出した数本をおろしカネで擦りボールに入れた。どうしてあくを抜いたのか、醤油だけで食べたのか、遠い昔の懐かしい思い出は、穴の大きさとそれに比べて細いヤマノイモの姿だけが鮮明に脳裏に残っている。

芥川龍之介が「芋粥」に書いた赤鼻の五位は風采の揚がらない男であった、第一背が低い。それから赤鼻で、目尻が下がっている、口髭は薄い、頬がこけているなどと押し出しが悪いから、いつも周囲から侮られる、しつこい嘲弄（ちょうろう）に耐えかねた五位が、泣くか笑うかわからない顔をして「いけぬのう、お身たちは」と弱々しく抗議する。芥川はこの人物造型をゴーゴリの「外套」から得ている。「背丈がちんちくりんで、顔に薄あばたがあり、髪の毛は赤茶け、それに目がしょぼしょぼしていて、額が少し禿げあがり、頬の両側に小皺が寄って、どうもその顔いろはいわゆる痔もちらしい」（平井肇訳）という冴えない風貌の持ち主で、日頃同僚から愚弄され続け、ついに我慢できなくなるとようやく口を開き「かまわないで下さい！何だってそんなに人を馬鹿にするんです？」と「胸に滲み入るような音（ね）」をあげるのです。ここで訳者は「ゴーゴリは内気で誠実な勤め人としての主人公に対する尊敬を要求するばかりでなく、人間として愛を要求している、高い道徳的意義がその点にある」又、別の人が「虐げられたものを憐れんだり、虐げるものを呪ったりすることは、もちろん何の関係もない。文学は人間の魂の秘かな深みえの呼びかけである」とチクリ、芥川の評判がよろしくない。

野口先生いわく、芥川の芋粥をレンズにして今昔を呼んできた読者の目のうろこ落とす清新さがある。これまでは「都市下級貴族の貧窮と対比して、地方の武士領主の勃興を語ったもの」という理解をひっくり返し「都市住人の致富説話にあった」と読み替える。今昔には「としごろに成りて、ところえたる五位侍ありけり」この注釈は「長年仕えてしかるべき地位を占めている」ではなく「前年に叙爵し、正月に五位についた男」つまり、地方領主がこれから出世しようとする可能性がある五位にコネを付けようとした。豪快な武人が貧しくしがちな五位を憐れんで芋粥を食べさせたという読み方は根本的に修正を迫られる。「返礼が義務的なものとして期待されている打算的な贈与、互酬的な贈与」と解説される。芋粥の世界は、都と田舎をつなぎ、芋粥の贈与と客人接待慣行をモチーフとして語られていく。それは摂関家饗宴という（王の宮廷に次ぐ）貴族社会の中核儀式の世界と地方の貴族的・領主的世界を視野の中に連続的に成功している」

武士は五位を自分の勢力圏内に案内した。敦賀の館に着いた五位は下へも置かぬもてなしを受ける。綿がふんわか詰まった夜具に包まれ横になる。夜分に少女が傍に来て世話をしてくれる、夜伽をしてくれる。大釜で煮た芋粥の接待がある。一ヶ月ほど敦賀で過ごし、接待を受け続ける。夜具に絹の生地、鞍付の馬が土産に贈られた。武士と五位、ふたりの間のギブアンドテイク、決して無駄な接待という名の投資ではない、ということだそう。